

国
語
A

(90分)

注意 解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(60点)

境界線の位相

境界線をめぐる政治はどのように展開するだろうか。境界線の両側が、線の所在について合意しているかぎり、両者は相互に他方に対して外部となる。そして、外部の外部として内部が定義され、そこでは何らかのルールが共有されると想定される。これが、境界線を引くことによつて、政治的な安定を実現できるという考え方の基礎であり、それは政治学の伝統の中に、形を変えながらレンメン¹と受け継がれてきたものである。

しかしながら、境界線についての合意なるものはいかにして成立するのか、いや、そもそも成立しうるものなのかが問題である。合意ということが言えるためには、合意を確認すべき範囲が明確でなければならぬ。ところが、いかなる境界線も自然的な基礎を持つものでないとすれば、境界線についての当事者・関係者を、境界線の成立に先立つて指定することはできない。何らかの線を引くまでは、線はどこにでも、どうにでも引けるのであり、したがって、あらゆる空間やあらゆる人々が当事者たりうるのである。例えば国境について考えてみよう。地面の上にある線を引く時に、一体どの範囲の人々にまで意見を求めれば、それは正統な線引きと言えるだろうか。これは、決して解けることのない問題である。これまでどうして境界線を引くことができたのかといえば、それは単に事実上引かれたのである。こうした事情は、ヨーロッパ諸国による植民地獲得競争の経過に最も明らかであるが、その場合にかぎられない。まるで自然に存在する単位であるかのような觀念が広く流布している所(例えば日本国)でも、境界線は征服や戦争などによつて形成されたものである。線自体は、さまざまな経緯の中で、事実上引かれてしまう。一度引かれると、それを維持しようとする力がさまざまな形ではたらくので、まるでその選択に何らかの必然性があったかのような錯覚が生まれることが多い。しかし、どんな線も、意見をきくべき全ての人々から意見をきき、きくべきでない人々からはきかなかつたという基準を、厳密な意味で満たすことは絶対にできない。その意味で、境界線を引く瞬間については、どんな合意論的な政治観であっても、全面的に正統化することはできないのである。

境界線に根拠がない以上、境界線の所在について、最終的な合意が成立することはない。さまざまな異議申し立てがなされる潜在可能性はつねにある。これが空間的な境界について起こる場合に国境紛争など、人間の群れの区切り方について起こる場合に民族紛争などを生むことは、指摘するまでもないであろう。

しかも、境界線は、その線の直近にだけ、大きな影響を及ぼすわけではない。ある線の存在の影響は、遠く離れた所にまで及ぶ。ここから出てくるのが、境界線の並列をめぐる問題系である。ある境界線を挟むAとBという二つの領域があるとしよう。Bが別の境界線によつてCと分離することは、Aにとつて大きな意味を持つ事柄である。いわゆる国際政治においては、敵の敵は味方という考え方が大きな役割を果たしてきたが、そこでは境界線の外部のそのまた外部は、内部に準ずるものである。こうした連鎖にもとづいて、Aという領域が、遠く離れたNという領域の境界線問題に深い関心をいだき、そこに介入するといったことさえしばしば生じるのである。このことは何も空間的な境界線に限られたことではなく、階級やジェンダーなどにかかわる境界線についても言える。

しかし、外部が内部的な性格を帯びるということは、そもそも内部と外部という二分法が成立しないことを示しているのはなからうか。ある人々は、ある時期には味方とされるが、どこか遠くで境界線が一本加わったり除かれたりしただけで、急に敵となる。味方である時期には、ルールが共有されていることが強調されるが、敵となった瞬間に、彼／彼女はルールを共有しない他者とされるのである。このような都台主義^Bは、現代政治においてもしばしば見聞されるが、それは単にある種の国家やある人々が身勝手だということではなく、境界線をめぐる政治そのものに由来するのではないだろうか。

ところで、ある境界線Aについての合意がひとまずあるとしても、それと異なる観点から引かれた境界線Bが、Aと交差する場合も多い。ここから、境界線の交差をめぐるさまざまな問題系が出て来る。例えば、国境線Aについてとりあえずの合意があるとしても、それと交差する形で、民族的・宗教的な境界線Bが走るといふのは、むしろ通常の状態である。また、階級的な境界線Bの存在が広く信じられるような局面もある。逆に、Aの内部があらゆる点において同質的で、Aの外部とはあらゆる点について異質だという状態は、とうてい想像することができない(にもかかわらず、国民国家の意義を強調する人々

は、しばしばこうした観念を広めようとするのであるが。しかるに、境界線は相互に交差することを最も嫌う。それは、当該の境界線の存在意味そのものを直接にゆるがすからである。かくして、国境を維持しようとする勢力は、民族的・宗教的な境界線をたかだか破線にすぎないものにまで弱めるか、あるいははずたはずたに切ろうとする。逆に民族的・宗教的な境界線は、それが従来为国境線以上に鮮明な線になることができれば、国境線を無化できることを承知しているので、そうした方向に物事を進めようとする場合もある。同じことは、階級的な線などについても言える。

交差した境界線のうちのどれが優勢になるかは、事実上の力関係によつて決まる。もう少し正確に言えば、どの境界線を支持するような実践を人々がより強力に行っているかが決め手となる。例えば、国境が相対的に他の境界線よりも重要であると多くの人々が考え、宗教や民族や階級などの他のありうる境界線よりもそれを重視する行動をとるならば、そのかぎりにおいて、国境は強固となる。重要なことは、境界線は人々の頭の中にあるのであつて、どこかに物理的に存在しているわけではないということである。もちろん、見えやすくするために線を引くということはあるかもしれないが、その物理的な線そのものが境界線ではなく、それは人々の脳裏にある境界線を単に反映しているにすぎない。ただし、このように言うからといって、人々は、何のクツタクもなく、いかなる境界線をも同じように楽に選びうるわけではない。ある種の境界線を選ぶことは、別の境界線を選ぶことよりも難しかったり易しかったりする。言い換えれば、特定の境界線に人々を誘導するような条件づけが存在していることは否定できない。

まず、空間的な境界線が引かれるのは、その範囲内の資源についての帰属を明確にすると共に、その範囲内で起こる出来事についての最終的なカンカツ権を定めるためである。近代的な主権国家は、こうした空間的な境界線の意義を最も強調してきた。そこでは、物事についての責任を明確にし、紛争を法的に解決するために、境界線が必要であるとされた。主権論者からすれば、ある出来事について誰なしどの機関が責任を持ち、どの法を適用するかをきちんとしなければ、誰も責任をとらない無責任状態になるか、弱肉強食の自然状態になってしまうのである。しかしながら、こうした主張は、境界内で適切な法の執行がなされるということをあくまで前提としたものである。もしも境界内で不当な実践が行われている場合には、境界線

は、それを正そうとする外部からの介入にとつて障壁となつてしまふ。逆に外部からすれば、境界線の向こう側には手を出せないという口実の下に、そこで行われているボウギヤクや抑圧に対して手をこまねていることも可能になる。境界線を引くことは、この意味で、境界線の内外にとつて（少なくとも、ある種の人々にとつては）有利なのである。こうした事情は主権国家において最も顕著であるが、帝国や地域共同体、さらにはシユミットのいわゆるラウムについてもほぼ同じことが言える。

人間の群れについての境界線が引かれるのは、その範囲内の人々にもつばら関心を寄せるためである。この場合、関心は二重の意味において寄せられる。一方で、その範囲内の人々は、群れの一部ないし全体のために動員され利用されるということの意味している。国民のために、人々は労働し、納税し、時には従軍しなければならぬ。人々は、特定の言語とそれにもとづいた文化を受け容れるよう、直接・間接に誘導される。（注²） ミシエル・フーコーが描いたように、人々に対して、特定のふるまいをしているか監視するまなざしが向けられるのである。しかし他方では、その見返りとして、境界内の人々は、群れに帰属し、そこから給付を受けることが可能になる。すなわち、彼らは外敵の侵入を避けるといふセキュリティ上の利得を受ける（少なくともそう思われる）し、国民経済の状況に応じて一定の生活水準を維持し、（幸運なら）福祉サーヴィスを受けることができるかもしれない。直接ないし間接に文化へと動員された結果として、国民的なアイデンティティを持ち、精神的な安定を得ることもできる。境界線は、事柄のカンカツを明らかにする点でも、人々の帰属を明らかにする点でも、大きな意味を持つているのである。

境界線を越えて？

人々は、境界線をめぐつてさまざまに争い続けてきた。境界線をどこに引くかをめぐる争い、ある境界線を実線と見なすか破線と見なすかをめぐる争いなどが展開されてきた。対立論的な政治観にもとづいて、実線の境界線を挟んで対立し合う場合もあれば、合意論的な政治観にもとづいて、合意ゲームを展開する中で、結果的に特定の境界線をつくり出し、維持する場合もある。

われわれは、境界線とどうつき合っていくべきだろうか。境界線が、排他的な機能を有することは間違いない。対立論については言うまでもないが、合意論においても、ゲームのルールを共有しないとされた空間や人々は、ゲームの外に排除される。今日でも用いられる、いや、今日ますます用いられるようになった表現によれば、「文明」の外に対しては「われわれ」のルールは適用されないとされるのである。

こうした排除の論理を潔しとしないとしたら、どうか。われわれは一切の境界線の存在を否定すべきなのか。国境のない、それどころか宗教的な対立も民族的な対立もない、階級的な対立さえない世界の実現を夢見るべきなのだろうか。今日、世界の富が一部の地域に⁵ヘンザイし、法の運用が恣意的に行われていることを考えれば、ある特定の単位が利己主義的に資源を独占したり、境界の存在を口実に内部で抑圧したりすることをさせないために、世界大の政治を考えることには十分な理由がある。しかし、仮にそのような政治が実現したとしても、その内部にもさまざまな亀裂が残り、対立が続くことを前提とすべきだろう。もしも、グローバルな決定単位が唯一の正しい決定単位であり、その内部に重大な対立があつてはならないと考えるとする^Eば、そうした単位そのものが、主権国家と同様に、(いや、対抗するものを持たない点で主権国家以上に)独善的かつ暴力的なものとなつてしまう。それは一見、ユートピアであるようで、実際には息苦しいものとなるだろう。単に境界線を拡張していつて、その外延が^(注3)世界の大きさと一致すれば、境界線の政治が越えられるわけではない。世界大の市民社会のようなものにしても、ルールの共有を前提とする以上、それは、境界線の政治の一種である。ここでは、定められたルールに異議を申し立てようとするものは、いつでも外部に排除されるからである。

ここでは、次のことを確認しておきたい。境界線を広げることによつて境界線を廃止しようとすべきではなく、境界線の存在を意識することによつて、境界線を相対化すべきである。これは、破線の境界線を想定する自由主義が正解であるという意味では必ずしもない。すでに示したように、自由主義は、自らのゲームの周囲に必ず生じる境界線については無自覚だからである。そうした境界線も含め、境界線が^Eつねにあることを認めつつ、いかなる境界線も絶対的なものではなく、変えられるものであると考えること。境界線を消そうとするのではなく、それに対して距離をおくこと。政治の外に出ようとしても無理であ

り、政治の中にとどまるしかないと認めること。こうしたことが、さしあたり求められているのではないだろうか。

(杉田敦『境界線の政治学』による)

(注) 1 シュミット——カール・シュミット。ドイツの思想家、法・政治・哲学者(一八八八〜一九八五)。ラウム(グロースラウム *Großraum*)=大きな空間)は主権国家にかわるものとして構想された政治的構成品。

2 ミシェル・フーコー——フランスの哲学者(一九二六〜一九八四)。

3 外延——一つ概念が適用される範囲、その概念が適用される事物の集合。

問一 傍線部1〜5のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 傍線部A「いかなる境界線も自然的な基礎を持つものではない」とはどういうことか。これを説明したものとして最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 線を引く場所や引き方は、自然の地形を反映しそれにそった形で引かれることが多いが、そればかりではないということ。

イ 線を引く場所や引き方は、すべてが日本のように海岸線が境界線になるような自然的な背景を持つわけではないということ。

ウ 線を引く場所や引き方は、恣意的なものの場合、長い間維持されたとしても、既成事実だから認められることはないということ。

エ 線を引く場所や引き方は、どんなものでも何かしら恣意的なものであり、合理的な背景や根拠をもつものはないということ。

オ 線を引く場所や引き方は、線の内側外側にかかわる人すべてが満足するような理由で引かれることはないということ。

問三 傍線部B「境界線をめぐる政治」とあるがそれはどのようなものか、そのありようを示す最も適当な一文を抜き出し、始めと終わりのそれぞれ五字を記せ(句点をのぞく)。

問四 傍線部C「特定の境界線に人々を誘導するような条件づけが存在している」とはどういうことか。これを説明したものとして最も適当なものを、次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 人々がどのような境界線を選ぶかについては、自由に選べるようでも、大多数にとつての最適な条件を満たす結果になるということ。

イ 人々がどのような境界線を選ぶかについては、選びにくいものと選びやすいものが存在し、まったく自由にはならな

いということ。
ウ 人々が境界線を選ぶときには、その人の持っている価値観が影響して、相対的に重要度の高い観点に従って選ばれていくということ。

エ 人々が境界線を選ぶにあたっては、自由に選べるように見えても、選択肢の表現に隠された意図による誘導が働いているということ。

オ 人々が境界線を自由に選ぶように見えて、用意された選択肢そのものがすでに、一定の条件のもとで設定されているということ。

問五 傍線部D「関心は二重の意味において寄せられる」とあるが、「二重の意味」とはどのようなことか。これを説明したものと最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 群れのために動員され利用される存在であると同時に、身の安全や精神の安定を享受する帰属的存在であるということ。

イ 群れの中でルールにそつた振る舞いが行われているか、他の者を監視する存在であると同時に、自らも監視される存在であるということ。

ウ 群れの一部や全体のために自ら労働し納税し従軍する存在であると同時に、集団のメンバーであることを自覚する存在であるということ。

エ 群れへの帰属によつて動員され貢献する存在になると同時に、他者から承認されたいという欲求が満たされる存在であるということ。

オ 群れの中で自分の意志に従つて自由に振る舞える存在であると同時に、社会のルールに従うよう要求される存在であるということ。

問六 傍線部E「そうした単位そのものが、主権国家と同様に、（いや、対抗するものを持たない点で主権国家以上に）独善的かつ暴力的なものとなつてしまう」とあるがどういうことか、一〇〇字以内で説明せよ。

第二問

次の文章を読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、表記の一部を改めた)。(60点)

橘^{たちばな}あおいは先輩の相田^{なづき}七月生とともに大手の画廊に勤めている。高額な美術作品の取引に神経を使い、海外への出張も度々出かける生活である。母は近所の医院で事務員として働いていたが、あおいが七歳のとき離婚してからも、苦勞している姿を見せずにあおいとその兄を育てあげた。八十六歳になる今は、都心の高齢者住宅でひとり暮らしをしているため、郊外でひとり暮らしをしているあおいは、週に一度は母の家を訪ねるようにしていた。

A

十歳の頃のことである。あおいは外耳炎をわずらって、母の勤務先の医院で診察してもらった。そのとき初めて、あおいは母が仕事しているところを見た。

受付のカウンターの奥、書類が積まれた事務机にかじりつくようにして、母は一心不乱にカルテの整理をしていた。娘がやってきても、べつだん話しかけるでもなく、ただただ自分の仕事に集中していた。あおいはなんとなく肩透かしをくらった気がしたが、ふと、母の机の前の壁に、ポストカード大の切り抜きの絵が貼ってあるのが目に入った。

それは、遠目に見ても、普通ではない空気をまとった女性の絵であった。

立ち姿の、うつくしい女性。赤いドレスに、光沢のある青い衣を肩がけにしている。そして、ふつくらと愛くるしい裸の幼子を両腕に抱いていた。このふたりは母と子なのだと、すぐにわかった。

透けるように白い肌、うっすらと紅をさした頬、伏し目がちなまなざし。彼女と幼子、両方の頭上には金色の輪がかすかに載っていた。

背景は、黒、ただひと色。ゆえに、人物像が闇の中から輝きをまとって浮かび上がっているように見えた。

あおいは、もっとよく見ようと、受付のカウンターに身を乗り出した。

机の前の壁にはやたら雑多なメモや文字の切り抜きがびっしりと貼り出されてあった。そのごちゃごちゃした中に、その女の人、すつと浮かび上がっていた。いまだあれば「掃き溜めに鶴」とひと言で言い表せるだろうが、そのとき、少女のあおいは、そのごちゃごちゃした中に浮かび上がる清らかな母と子を、なんと言っているかわからなかった。

あおいがのぞき込んでいるのに気づいてははずだったが、母は、あおいのほうを振り向きもせず、ひたすら作業に熱中していた。娘が職場にやってくるまで、どこか照れくささがあつたのかもしれない。

診察が終わって、支払いを済ませて帰るとき、もういちどのぞき込むと、母は手を止めてこちらを振り向いた。
(その絵、何?)と小声で訊くと、母は、(あ、と、で)と口を動かして、小さく手を振った。

帰り道、自転車のペダルをこぎながら、あおいの胸はほのぼのと明るかった。

脇目もふらずに働く母の姿は、なんだかかっこよく見えた。そして、机の前にごちゃごちゃとメモだのなんだのを貼る以外に、たった一枚きりではあつても、絵の切り抜きを貼る余裕が母にあるのだ——ということがわかって、うれしかった。

その夜、帰ってきた母に、あらためて、あの絵何? と訊いてみた。

——知らない、と母は答えた。

待合室に置いてある古雑誌を破棄するまえに、ばらばらとページをめくっていたら、目に留まったのだという。じつとみつけていると、なんだか吸い込まれてしまうような気がした。本物の絵ではないけれど、絵を見てそんな気持ちになったのは初めてだった。なんだかわからないけど、捨てるのが惜しく、その絵のページを切り抜いて、机の前に貼ってみた。

——なんだかわかんない。でも、きれいだから、見てたら元気になる気がして。

そう言つて、母は照れ笑いをした。それから、

——あんた、よくみつけたねえ。やつぱり、絵が好きなんだね。

妙に感心していた。今度は、あおいのほうが照れ笑いする番だった。

中学生になってから、あの絵の身元がわかった。教科書に載っていたのをみつけたのだ。

（大公の聖母）。イタリア、ルネッサンスの画家、ラファエロが描いた傑作だった。母に教えてあげようと思いながら、それっきり忘れてしまった。

なんだかわかんない絵、けれどその一枚の切り抜きは、七十歳で退職するまで、事務机の前の壁から母を励まし続けたのだらう。

（中略）

B

「あなたの携帯が何回も鳴ってたよ」

教えられて、あおいは跳ねるように立ち上がった。あわてて携帯を探したが、ない。布団の上にも、バッグの中にも。

「え、どこ？ お母さん、どこで携帯鳴ってた？」

「そっちのほう」

（注1）

母は、ハンドでダイニングの方を指し示した。ダイニングの椅子の背もたれに掛けたままにしていたコートのポケットを探ると、あった。画面には七月生からの着信とメッセージが矢継ぎ早に入っている。（例の作品、売り主がホニイしろう、いますぐドルを用意しないとゲームオーバー！とのメッセージを見て、あおいは真っ青になった。

大急ぎで服を着ているところへ、母が、「頼みたいことがあるんだけど、いい？」と言いだした。

「なに？ ダメ、いまは」と早口で答えると、

「でもね、困ってるの。次にあなたが帰ってきたときに頼もうと思ってたのよ」

食い下がつてくる。あおいはコートを羽織りながら、

「だからダメって言ってるでしょー！」

ついでなってしまう。母は、たちまち、しおれた青菜のようにしゅんとなった。

はっとして、あおいは「ごめん」とすぐにあやまった。

「でも、ちょっと急いでて、いまはダメなの。いまじゃなきやダメ？」

母は、雨の中で身震いする犬のように、ふるふると頭を振った。

「いまじゃなくても、いい」

力なく答えた。いかにも憐れな様子で。あおいはむしろ苛立ちを覚えた。いつのまに、こんなおかしな演技力がついたのでろうか。

「頼みたいことって、何？」

苛立ちをどうにか押しつぶして訊くと、母は、叱られた少女のようにうつむいて、

「ハーモニカがね。音の出が悪くて……直しに出してほしいんだけど……」

あおいは、ため息をついた。そんなことをこのタイミングで頼む母の無神経さと、そんなことにすら応えてやれない自分のふがいなさ、その両方に腹が立った。

「ごめん」ともう一度、あおいはあやまつた。

「今度ね」

うん、と母はうなずいた。

「今度でいいよ。……いつ？」

「そうね、いつになるかな……でも、そのうちに。約束するよ」

あおいは腕時計をちらりと見た。もう出かけなければ、大商いが吹っ飛んでしまう。

「ごめん、また連絡する。じゃあ」

大急ぎでパンプスを履くと、廊下にぼつねんと立ち尽くす母のほうを振り返りもせず、出ていった。

(中略)

C

ほっと力が抜けた。が、スマホを持つ手がずつとぶるぶる震えている。その様子を見て、「どうしたの」と七月生が声をかけた。

「お母さんに何かあったの？」

あおいは、母が転倒して入院したこと、再度手術を受ける決心をしたらしいことを七月生に伝えた。七月生は、黙って聴いていたが、

「わかった。じゃあ、橘さんはとにかく、いったんホテルに戻って待機して」

と言った。

あおいは、「いえ、私もミーティングに参加します」と突っ張った。

「そのためにここまで来たんですから……」

「橘さん、動揺してるよ。そんなとこ、相手に見せちゃまずいでしょ。とにかく、落ち着いて、お昼までには私もホテルに戻るから」

七月生に背中を押されて、あおいはしびしび歩き出した。

——相田さん、ぜんぶ、お見通しなんだな。

確かに動揺していた。七月生の言った通り、ビジネスの話をするには最低のコンディションである。ここはおとなしく引き上げたほうが無難だと、あおいは悟った。

ヴェッキオ橋を渡りながら、ほんの十分後の運命ですら人は知ることができないものなんだな、とつくづく思った。

十分まえには、胸を躍らせながらこの橋を渡ったのに、まさか急転直下、十分後に胸に不安を抱え込んでひとり帰るなんて、予想もなかった。

母も、きつとそうだろう。笹川^{ささがわ}さんとお茶を飲みながら楽しくおしゃべりしていたに違いない。そのほんの十分後に救急車

でハンソウされることになろうとは、どうして想像できただろうか。²

あおいは、ヴェッキオ橋の真ん中あたりに行³んで、滔⁴々と流れるアルノ川を眺めた。朝の光をまぶしく弾^{はじ}く川面をみつめて、あおいは目を細めた。

——死んだらそれで寿命だもの。

兄に聞かされた母の言葉が、まるでさつき直接聞いたかのように、あおいの耳の奥で響いていた。

ホテルへ帰って、ひとりになるのが怖かった。余計なことを考えてしまいそうで。

橋の上にはずらりと軒を並べる宝飾店のショウウィンドウを見るともなしに眺めながら、あおいの足は、いつしかどこかへ——ウフィツイ美術館へと向かつていた。

学生時代、胸をときめかせながら訪れた美術館。一度は見たいと思っていたポッティチェリの〈ヴィーナスの誕生〉を目にした瞬間に感じた、あのまばゆさ。

——もう一度見にいつてみよう。

が、入り口には長蛇の列ができていた。入場までに一時間以上はかかるとわかって、あきらめた。会いたかった友につれなくされたような、しょっぱい気持ち広がった。

だったら、とあおいは気を取り直した。行ったことのない美術館へ行ってみよう。フィレンツェは美の宝庫なのだ。いくらでも見るべきものはある。

そうして、あおいが訪れたのはパラティーナ美術館だった。

十六世紀に建てられたピッティ宮殿の一角、石造りの荘厳な建物である。いかにも固いフアサード^(注2)からは想像もできないほど、内部には華麗な装飾の部屋が次々に連なり、壁という壁に、ルネッサンス期からバロック、ロココまで、各時代の絵画がところ狭しと飾られている。

四方を仰ぎ見て、あおいは、わあ、と声には出さずに心の中で歓声を上げた。

もう長いこと、美術業界の第一線で仕事をしている。いまや日常的にアートに接しているのに、初めての美術館に足を踏み入れた瞬間のときめきは、少女の頃からちつとも変わっていない。

ひとつひとつ、じっくりと、というよりも、空間ごとの絵画を体感しながら、あおいは奥へと進んでいった。ときおり、あつと驚くような有名な絵が飛び込んでくる。美術書で見たことのある名画が、ここにあったのか。いつしか夢中になって、あおいは美の迷宮をさまよった。

そして――。

見覚えのある一枚の絵の前で、あおいの足がびたりと止まった。

漆黒の中に浮かび上がる、光り輝く聖なる母と子。微笑をうつつすらと口もとに点して、慈愛に満ちたまなざしを我が子に注ぐ、そのうつくしい姿。

あ。これは――。

――ラファエロの「大公の聖母」だ。

あおいは、光のヴェールに包まれた聖母と幼子イエスの像を前にして、記憶の川をさかのぼる小舟に乗った。

遠い日、母の仕事机の前に貼られていた一枚の切り抜き。古雑誌のページに載せられていた写真の切り抜きである。捨てればいい、けれど捨てるのが惜しくて、マドンナを壁に貼り出した母。娘にみつけられて、なんだか照れくさそうだった。

――お母さん。

あおいは、胸のうちで呼びかけた。

――思い出したよ、約束。

今度、帰ったら……ハーマモニカ、直しに出すからね。

あおいの目に、ふいに涙が込み上げた。同時に、うふふ、としよっぱい笑いも込み上げた。

(原田マハ「マドンナ」による)

(注) 1 ハンド——マジックハンド。手の届かない物を取るための道具。

2 ファサード——建物の正面。

問一 傍線部1～5のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めよ。

問二 傍線部A「照れ笑いをした」とあるが、このときの母はなぜ照れているのか、具体的に説明せよ。

問三 波線部X「そんなこと」、波線部Y「そんなこと」とあるが、それぞれどんなことと言ひ換えられるか。次の

II の中に適当な語句を入れて解答を完成させよ。

X 「そんな
こと」

Y 「そんな
こと」

問四 傍線部B「ふいに涙が込み上げた」とあるが、どのようなことによつて「涙が込み上げた」のか、二点にまとめよ。

問五 傍線部C「うふふ、としよっぱい笑いも込み上げた」とあるが、これはどのような心情を表現したのか。八〇字

以内で説明せよ。

I

問六

B と C を比較したとき、あおいの内面についてどのようなことが言えるか、次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア B では母について近所の医院で事務員をしていた頃の苦労人の印象しかなかったが、C ではハーモニカを楽しむ安穩な老人の印象が変わった。

イ B では仕事のプレッシャーの中で、母に向き合う余裕がなかったが、C では母と一緒に生きられる時間の意味にも気づけるようになった。

ウ B では美術作品を高額な取引材料としてしか捉えられなくなっていたが、C では少女の頃のように、純粹なときめきをもって接する感覚がよみがえってきた。

エ B では自分だけが家計を支えていることに不満をもっていたが、C では母が苦労して自分を育ててくれたことを思い出して、感謝できるようになった。

オ B では生活習慣に口うるさく頼み事の多い母の存在を煩わしく思っていたが、C では母が自分の存在を支えていることに気づけるようになった。

第三問

次の文章は、父の大納言を亡くし、後見人を失った姫君の物語の一節である。これを読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた)。(40点)

やうやう年月も過ぎ行けば、ありしにもあらず荒れ果てて、築地なども崩れて、門ならぬ通ひ路もいと多し。庭には蓬生(注1)ひ茂り、いと露けきにも、光源氏の露分けけん蓬が門、思ひやられて悲しきに、秋も半ばになりぬれば、風の音、虫の声々もひまなきに、いつよりも月隈(注2)なきに、格子なども下ろさで、姫君端近くながめ給ひても、ただ父君の御こと思し忘るる時なく、月の光、風の音につけても、よろづもの悲しくて、御傍(注3)なる箏の琴を引き寄せて、少しかき鳴らし給へり。

折しも、宮の三位の中將と聞こゆる人おはしけり。花の色、月の光にも、この世は憂きものとのみ思ひ給ひて、夜もすがら(注4)いつもあくがれ給ひて、よしある所は入りて、垣間見給へるに、思はず箏の琴をゆるらかに盤渉調(注5)に弾き鳴らすを聞き給ふに、おしなべての爪音(注6)にはあらず。いかなる人なるらんとゆかしくて、築地の崩れより入り給ひて、いづれとなくむつかしき蓬が露うち払ひて見給ふにも、我が通ひ路の関守は据ゑぬにやと心やすくて、ものの隅(注7)に立ち隠れて見給へば、端近くながめけるとおぼえて、御簾なども少し巻き上げて、いとをかしげなる若き人、二三人ばかり見ゆるに、いづれか琴弾く人と見給へども、この中には見えで奥の方に聞こゆ。

月隈なく差し入りて、障りなく見ゆるに、わづかに十四五にやと見えて、紛(注8)ふべくもなくいつくしげにて、月にもてはやされたる髪のかかり、手つきなどは、世の常の人とは見えず。顔は定かに見えねども、空をつくづくと目守りて、いみじうもの思へるさまなり。らうたげに、気高く見えたり。誰ばかりかこれほどならんと、あやなく御心もとどまりて、出で給ふ心地も

し給はねば、塚(注4)に車を入れける例(注4)にやとまでおぼえ給ひて、なほ立ち聞き給へば、御前(注5)なる人々いとあはれなる物語して、故大納言殿の御ことなど語り出でて、「おはしまさましかば、かく心細きさまならましや」「今はいかなる方にも定まり給ひなんものを」などとうち泣きなどするに、いとどもよほされて、姫君もいみじくながめ入りて、

もの思ふ涙に空はかきくれて我から月もおぼろにぞ見る

と、うちながむともなきさま、げに類あらじと見えたり。また、(注6)十七八ばかりにやと見えて、これもよしあるさまにて、

さやかにて月のやどれる池水をくもるとや見ん秋の夜なれば

と、うちながめたるも、らうたげなり。

(『あきぎり』による)

(注) 1 光源氏の露分けけん蓬が門——『源氏物語』蓬よもぎのま生巻を踏まえた表現。

2 盤渉調——雅楽の六調子の一つ。

3 我が通ひ路の関守は——「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとくうちも寝ななん」(『古今和歌集』業平朝臣、『伊勢物語』五段を踏まえた表現。

4 塚に車を入れける例——未詳。

5 御前なる人々——ここでは、故大納言家に仕える女房たちのこと。

6 十七八ばかり——ここでは、女房たちの中の一人の様子を表す。

問一 波線部 a・b の主語は誰か、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ(同じ記号を複数回用いてもよい)。

ア 姫君 イ 三位の中將 ウ 御前なる人々 エ 大納言

問二 傍線部A「夜もすがらいつもあくがれ給ひて」を現代語訳せよ。

問三 傍線部B「築地の崩れより入り給ひて」とあるが、この時の心情はどのようなものか、本文の内容に即して具体的に説明せよ。

問四 傍線部C「さやかにて月のやどれる池水をくもるとや見ん秋の夜なれば」とあるが、この和歌は誰のどのような様子に対して、どのように思うことから詠まれたのか、簡潔に説明せよ。

問五 この文章において、姫君と三位の中将には心の持ちように共通する点が見られるが、それはどのようなものか、本文の表現を踏まえながら説明せよ。

第四問

次の文章を読んで、後の問に答えよ(設問の都合上、本文を一部改めた箇所がある)。(40点)

送^ル安井仲平^ノ東遊^ヲ序

嘗^テ 1 觀^{ミルニ} 於^ニ 當^今 之^ノ 學^徒、其^ノ 在^ニ 庠^校、孜孜^{シシテ} 勤^苦 者^ハ 有^リ 矣。及^{ビテハ} 退^{クニ} 庠^ヲ 則^チ 倦^{ラム} 焉。退^{キテ} 庠^ヲ 而^モ 不^レ 倦^マ 者^ハ 有^リ 矣。及^{ビテハ} 畜^ニ 妻^子 焉。畜^ニ 妻^子 而^モ 不^レ 衰^ハ 者^ハ 有^リ 矣。及^{ビテハ} 獲^ニ 祿^位 則^チ 廢^ス 焉。獲^ニ 祿^位 而^モ 不^レ 廢^セ 者^ハ 有^リ 矣。逢^ヒ 一^ニ 患^ニ 嬰^{カレバ} 一^ニ 災^ニ 則^チ 挫^ク 焉。蓋^シ 其^ノ 退^{キテ} 庠^ヲ 而^モ 倦^ム 者^ハ 其^ノ 志^{小ナル} 小^{ナル} 者^也。畜^ニ 妻^子 而^モ 衰^{フル} 者^ハ 其^ノ 器^{狭キ} 狹^キ 者^也。獲^ニ 祿^位 而^モ 廢^{スル} 者^ハ 其^ノ 意^{滿ッル} 滿^{ッル} 者^也。逢^ヒ 一^ニ 患^ニ 嬰^{リテ} 一^ニ 災^ニ 而^モ 挫^{クル} 者^ハ 其^ノ 氣^{不レ剛ナラ} 不^レ 剛^{ナラ} 者^也。吾^{ルコト} 觀^ニ 於^ニ 當^今 之^ノ 學

徒^ヲ衆^{おほシ}矣。其能^ケ退^{キテ}庠^ヲ而^モ不^レ倦^マ畜^{ヒテ}妻子^ヲ而^モ不^レ衰^ハ獲^テ禄位^ヲ

而^モ不^レ廢^セ逢^{ヒテ}災患^ニ而^モ不^レ沮^{ハバマ}不^レ挫^{ルコトケ}（我が安井仲平のごとき者は、未^カ

だ多くは覲^あはざるなり。）

『岩陰存稿』による

- (注) 1 東遊——江戸時代の儒者、安井仲平(息軒)が四十四歳の時、六十日間の休暇を取り、江戸を出発して、日光・会津・米沢・仙台・松島などを巡つたことをいう。
- 2 庠校——学校。
- 3 孜孜——怠らずに努めること。
- 4 退庠——学校を離れる。
- 5 覲——遇う。

問一 傍線部1と傍線部2の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二 傍線部A「則倦焉」は何に「倦」むのか、本文中の語句を抜き出して記せ。

問三 傍線部B「獲禄位而廃者、其意満者也」の内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 官職を得ると、その人はそれで十分だと思い、努力を怠るようになる。
- イ 官職を得ると、その人は欲が出てさらに高い官位を求めるようになる。
- ウ 官職を得ると、その人はやりがいを感じて一層学問に励むようになる。
- エ 官職を得ると、その人は偉くなったと勘違いして、慢心してしまう。
- オ 官職を得ると、その人は出世欲がなくなり、虚無的になってしまう。

問四 傍線部C「我が安井仲平の……とき者は、未だ多くは観はざるなり」を白文にしたものとして適当なものを、次のア～オの

中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 我之若安井仲平者未多観多也
- イ 我若安井仲平者未多観也
- ウ 若我安井仲平者未多観也
- エ 若我安井仲平者未多観也
- オ 我若安井仲平者未多観也

問五 作者は安井仲平をどのような人物であると評しているか、本文の内容に即して具体的に説明せよ。

第一問

国語A 解答用紙 (二枚中 その一)

受験番号

得点

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1		始め			
2					
3		終わり			
4					
5					

第二問

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1		I			
2					
3					
4		II			
5					

受験番号

--

国語A 解答用紙 (二枚中 その二)

第三問

問一	問二	問三	問四	問五
a				
b				

第四問

問一	問二	問三	問四	問五
1				
テ				
2				
シ				

国語A正答例

第一問

問一 1 連綿 2 屈託 3 管轄 4 暴虐 5 偏在

問二 エ

問三 いわゆる国々ものである

問四 イ

問五 ア

問六 内部に対立があつてはならないとするグローバルで境界線の無い世界単位にも、共有されるルールがあり、それに異

議を申し立てればそこから排除されるが、それを受け容れ対抗しうる外部がないということ。

第二問

問一 1 翻意 2 搬送 3 たたず(んで) 4 とうとう 5 とも(して)

問二 誰のどんな絵かも知らないのに、また、雑誌の切り抜きにすぎない絵なのに、見ていたら元気になるという理由でわざわざ職場の机の前に貼っていたところを娘に見つけられたから。

問三

I

 急がなくてもよい

II

 簡単にしてあげられる

問四・ラファエロの絵がきっかけでその絵の切り抜きを貼っていた昔の母の様子が思い出されたこと。

・兄から聞いた母の「寿命」という言葉から死別を意識した切なさの中で、果たしていない約束があったことを思い出したこと。

問五 母との約束を忘れていた自分にあきれつつも、その約束を果たす時間が残されていることに安心し、帰国したら母の

気持ちに寄り添っていこうという前向きな心情。

問六 イ

第三問

問一 a エ b ア

問二 常々一晩中さまよい歩きなさって

問三 不意に耳にした箏の琴の音が並一通りのものではなく、どのような人が弾いているのか知りたいという心情。

問四 姫君の悲しみに暮れる様子に対して、姫君を励ましたいと思うことから詠まれた。

問五 姫君は月の光や風の音につけても、何事も何となく悲しく思い、また三位の中将は花の色や月の光にも、この世はつらいものとはばかり思うというように、両者は物事を悲観的に捉えている点で共通している。

第四問

問一 1 かつテ 2 けだシ

問二 孜孜勤苦

問三 ア

問四 ウ

問五 学校を離れても、家庭を築いても、地位や俸禄を手に入れても、さまざまな困難や災難に直面しても、学問への情熱を絶やさない、類稀な人物。